



# るうてる



2024年  
8月  
No.920

■発行所 ■  
日本福音ルーテル教会事務局広報室  
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1  
電話 03-3260-8631

■ウェブサイト ■ <https://jelc.or.jp/>  
■E-mail ■ [jelc@jelc.or.jp](mailto:jelc@jelc.or.jp)

■発行人 ■ 竹田大地 koho@jelc.or.jp  
■印刷人 ■ 精文堂印刷株式会社  
■定価 ■ 1部 40円 (郵税を含む)  
■振替口座 ■ 00190-7-71734

## 説教 「わたしたちはキリストの体」

日本福音ルーテルみのり教会・岡崎教会牧師 三浦慎里子

「キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことよってしっかりと組み合わせられ、結び合わされて、おのおの部分は分にに応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです。」

(エフェソの信徒への手紙4:16)



この春神学校を卒業し、牧師としてみのり教会と岡崎教会に着任してから、3カ月が経ちました(執筆当時)。豊橋市の牧師館に住みながら、田原市、岡崎市にある各礼拝堂にも行き来する日々を送っています。初めての経験に戸惑いを覚えたり、やる気が空回りして失敗したりすることもありますが、教会員の皆さんに助けていただき、徐々に慣れていっているところですが、私が初めて就職をした最初の新卒時代にも、やはり戸惑ったり、空回ったりしていた

ことを覚えています。あの頃に比べればかなりずぶとくなつたものの、2度目の新卒時代を与えられて初心にかえることができるのは、とても嬉しく有難いことです。

この3カ月の間に、対面や電話などで、教会員の方々のお話を聞かせていただく機会が増えました。皆さんの普段の穏やかな様子からは想像もできないほど大きな試練や困難を経験して来られたことや、いかに信仰が人を支え導くかということ

を思い出すのです。「キリストの体」とは、教会の多様性と一致を表します。全く違う経験をして生きてきた、性格も考え方も異なる多様な人々が、キリストと出会い、招かれて、礼拝に与る。肩を並べて神を賛美し、みことばを聞き、心をひとつにして祈る。交わるはずの無かつた人々がキリストによつて交わり、互いを思いやったり、助け合ったりするうちに、次第に互いにとつて欠くことのできない大切な存在となり、キリストの体である教会を造り上げてゆく。その現場に遣わされ、人間の力では成し得ない神様の業を目的にしたりするの

は、誠に大きな喜びです。とはいえ、教会はこの世で生きる私たち人間の集まりですから、穏やかな時ばかりではないでしょう。「キリストの体」が怪我や病にむしばまれ、平安が失われることもあり得ます。私自身、その時

が来れば、もはや笑つていられなくなるのかもしれない。聖書は私たちが「神から招かれ」(4:1)と励まし、「その招きにふさわしく歩み、一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもつて互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい」(4:1-3)と勧めます。それは特別な行いではありませんが、ただ自分の利益のためだけに生きる者には難しいことです。神様の招きは、これらのすべてを満たされるイエス様の十字架のもとへと私たちをいざない、そこから出発するよう導きます。私は希望を抱いています。これから何が起るかを恐れるよりも、主の憐れみに依り頼み、今与えられている賜物を生かし、キリストの心を表してゆくことを選びたいのです。遣わされた教会の人々と共に。

今も忘れられない過去など、いろいろあります。でもそれら一つ一つがあるから今の自分があるのではないのでしょうか。少し自分の経験を話すと私は今、車椅子を使う生活です。でも20代半ばまでは歩いていました。10代までは走って歩きました。このような過去は今の自分を苦しめることもありすが成長させてくれることもあるような気がします。

私自身にもいろいろな経験があるように、お一人お一人にもたくさんあるのではないのでしょうか。忘れたい過去も後悔している過去も悲しい過去も嬉しい過去も。それら一つ一つはあなたが今を生きている証です。そんなまた奇麗事言つてと思うかもしれませんが、嘘ではありません。過去があつたから今があります。ずっと二人ではありません。



三人の天使に支えられたキリストの体 1600~1610 作者不明 Kunsthistorisches Museum

体全体は、あらゆる節々が補い合うことよってしっかりと組み合わせられ、結び合わされて、おのおの部分は分にに応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです。「というエフェソ書4章16節のみことば

を思い出すのです。「キリストの体」とは、教会の多様性と一致を表します。全く違う経験をして生きてきた、性格も考え方も異なる多様な人々が、キリストと出会い、招かれて、礼拝に与る。肩を並べて神を賛美し、みことばを聞き、心をひとつにして祈る。交わるはずの無かつた人々がキリストによつて交わり、互いを思いやったり、助け合ったりするうちに、次第に互いにとつて欠くことのできない大切な存在となり、キリストの体である教会を造り上げてゆく。その現場に遣わされ、人間の力では成し得ない神様の業を目的にしたりするの

は、誠に大きな喜びです。とはいえ、教会はこの世で生きる私たち人間の集まりですから、穏やかな時ばかりではないでしょう。「キリストの体」が怪我や病にむしばまれ、平安が失われることもあり得ます。私自身、その時

が来れば、もはや笑つていられなくなるのかもしれない。聖書は私たちが「神から招かれ」(4:1)と励まし、「その招きにふさわしく歩み、一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもつて互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい」(4:1-3)と勧めます。それは特別な行いではありませんが、ただ自分の利益のためだけに生きる者には難しいことです。神様の招きは、これらのすべてを満たされるイエス様の十字架のもとへと私たちをいざない、そこから出発するよう導きます。私は希望を抱いています。これから何が起るかを恐れるよりも、主の憐れみに依り頼み、今与えられている賜物を生かし、キリストの心を表してゆくことを選びたいのです。遣わされた教会の人々と共に。

今も忘れられない過去など、いろいろあります。でもそれら一つ一つがあるから今の自分があるのではないのでしょうか。少し自分の経験を話すと私は今、車椅子を使う生活です。でも20代半ばまでは歩いていました。10代までは走って歩きました。このような過去は今の自分を苦しめることもありすが成長させてくれることもあるような気がします。

私自身にもいろいろな経験があるように、お一人お一人にもたくさんあるのではないのでしょうか。忘れたい過去も後悔している過去も悲しい過去も嬉しい過去も。それら一つ一つはあなたが今を生きている証です。そんなまた奇麗事言つてと思うかもしれませんが、嘘ではありません。過去があつたから今があります。ずっと二人ではありません。



③「今を」  
伊藤早奈





リレーコラム

「全国の教会・施設から」⑮



日本福音ルーテル 東京池袋教会

永吉秀人

（日本福音ルーテル 東京池袋教会牧師・日本福音ルーテル教会 総会議長）

9年には東鴨でも移転しています。「転宣」による開拓伝道でありましたが、ようやく1931年となつて現在の池袋の地に第一会堂となる教会が建築されました。

この地は、1923年にフィンランド・ミッションにより神学塾開校のために購入されたものであり、1926年には9名の卒業生が伝道師として派遣されています。そこを宣教の地と定め、フィンランド・ミッションによる「東京福音ルーテル教会」との名乗りをあげました。

東京池袋教会は今年、宣教117年目の年を迎えています。その第二歩を踏みしめたのは1907年7月、フィンランドからの宣教師シーリ・ウーシタロ宣教師、コスケンエミニ宣教師夫妻、副島秀子氏であり、その地は東京千駄ヶ谷でした。

1907年に千駄ヶ谷から始まった宣教草創期、1912年には千駄ヶ谷で移転、1916年には東鴨に移り、西東鴨福音ルーテル教会の看板を掲げつつ、192

に伴い、現在の「日本福音ルーテル東京池袋教会」と整えられていったと思われま。

東京池袋教会の歴史においては、開拓伝道の度重なる「転宣」に加えて、会堂建築においても3度の変遷があります。1931年に第一会堂が建てられて以後、1951年には第二会堂が献堂され、そして1985年に第三会堂としての現在の礼拝堂が与えられました。

100年を超える歴史は尊い。初めから居た者はおらず、すべては受け継いだ恵みです。今も交わされる「100年前に私のおばあ様がね」という教会の思い出話はある。フィンランドの献身的な祈りから始まった灯は、今も池袋の地に掲げられています。



東京池袋教会礼拝堂



東京池袋教会会堂

改 宣 教 5

「戦争レクイエム」

永吉秀人 総会議長（日本福音ルーテル 東京池袋教会牧師）

「レクイエム」と呼ばれる楽曲があります。これは「死者のためのミサ曲」であり、典礼文に曲が付けられたものです。よく知られたものにモーツァルト、ヴェルディ、フォー

レ作曲のミサ曲があります。

の作品として扱われています。

昨年、小澤征爾指揮、サイトウ・キネン・オーケストラによる「戦争レクイエム作品66」というCDを聴く機会がありました。

作曲家はベンジャミン・ブリテン（1913～1976）。1961年、ブリテンは「戦争レクイエム」の作曲にあたり、教会の伝統的な典礼文だけによるレクイエム（ミサ曲）ではなく、反戦の詩を織り込んで作曲しています。

そのうち、ミサ曲として数えられることはなく、戦争レクイエムという一つの国づくりが始まりました。5月24日から6月2日にかけて「過去を祝い、未来をつくる」をテーマに、南西の海岸都市モスターで記念式典が行われ、LWF議長も出席しました。

の物語を用いたオーウェンの「老人と若者の寓話」が挿入されます。

「戦争レクイエム」と呼ばれる楽曲があります。これは「死者のためのミサ曲」であり、典礼文に曲が付けられたものです。よく知られたものにモーツァルト、ヴェルディ、フォー

の作品として扱われています。

の物語を用いたオーウェンの「老人と若者の寓話」が挿入されます。

の物語を用いたオーウェンの「老人と若者の寓話」が挿入されます。

世界の教会の声

浅野直樹 Sr.（世界宣教主事 市立教会牧師）

ノルウェーのキリスト教法

ノルウェーにはキリスト教法という法律があり、2024年の今年も施行されて1000年目を迎えました。名前が示すように、この法律はノルウェーの教会と社会において歴史上非常に大きな意義があります。

この法律は1024年、オラフ2世の治政下に制定され、ノルウェーはここからキリスト教国と

「戦争レクイエム」と呼ばれる楽曲があります。これは「死者のためのミサ曲」であり、典礼文に曲が付けられたものです。よく知られたものにモーツァルト、ヴェルディ、フォー

の作品として扱われています。

の物語を用いたオーウェンの「老人と若者の寓話」が挿入されます。

の物語を用いたオーウェンの「老人と若者の寓話」が挿入されます。

の国づくりが始まりました。5月24日から6月2日にかけて「過去を祝い、未来をつくる」をテーマに、南西の海岸都市モスターで記念式典が行われ、LWF議長も出席しました。

者の権利を守るための法律ともいえます。「この法律が1000年にわたりノルウェーに存続し、その間キリスト教の教えによつて私たちが共に生きていくよう導かれたことを感謝できることは意義深いです。」ノルウェーだけでなく世界的にも、人間の価値観が絶えず試されています。キリスト教的人間観を重んじる教会として国家として、こうしたチャレンジにどう向き合うかを考えていかねばなりません。

伝統的にノルウェーでは教会と国家の関係は深く、1537年にはクリスチャン3世が改革を行ないルーター派の教義が国

の宗教となりましたが、この教会と国家の結びつきは2017年に終わりました。記念会では、パネルディスカッションがあり、スコットランド監督LWF議長とトウベイト監督との間にアングリカン教会のマルレット主教が対談し、そのなかでLWF議長は次のように述べました。「人権は、人間の尊厳の基盤であり、それゆえ我々キリスト者、ルーター派の信仰としてアイデンティティの基盤でもあります。神から賜ったすべての人の尊厳、殊に抑圧された弱い立場の人々の尊厳を高めるために私たちは召されています。LWF加

盟教会が人権について学ぶことは神学と信仰の鍵となります。人権擁護は教会がなすべき宣教のコアであり、教会が発する預言の声です。不義暴力、憎しみ、不寛容を社会からなくすために戦うことで人権、尊厳、正義と平和を実現していく。それがLWFのビジョンです。」



https://lutheranworld.org/news/norway-celebrating-1000-years-christian-law



### 報告:「課題の視点で聖書を読む」オンライン学習会

小泉基

(日本福音ルーテル札幌教会  
牧師・社会委員会委員長)

日本福音ルーテル教会の社会委員会は6名の委員からなる小さな委員会です。全国に委員さん方が点在する中、継続的な活動を行う難しさを感じてきました。ところがコロナ禍によってオンライン機器が一般化したことにより、思いがけず委員会活動の新しい地平が開かれてきました。今総会期の委員は、課題と聖書を切り結びオンラインでの連続学習会を開催したいと話していました。その結果が、以下の3回の学習会です。

**第1回「ヘイトクライムの視点で聖書を読む」**  
(2023年9月11日)  
秋山仁牧師

昨年、関東大震災における在日朝鮮人・中国人の大量殺害事件から

100年目となる年で、福音書などに示された私

たちに對する神様の期待、といった聖書的な観点からも、私たちが直面している課題についてわかりやすくお話し下さいました。

**第2回「脱原発の視点で聖書を読む」**  
(2024年2月26日)  
内藤新五牧師

内藤牧師はいつも、日本の原子力政策の危険性と、原子力の平和利用の名のもとに行われる核兵器開発の問題性を明瞭にお話し下さいました。今回は加えて、天地創造の物語やイザヤ書、マタイ

**第3回「ジェンダー正義の視点で聖書を読む」**  
(2024年5月21日)  
安田真由子さん

都南教会の信徒であり、NCCジェンダー正義に関する基本方針策定プロジェクトでも中心的な役割を果たされた安田さんが、性の多様性やジェンダー正義についての基本的知識の解説にはじまり、聖書の中でも表現されてきた性をめぐる差別や偏見や抑圧を、教会に集う私たちがどのように越えていくことが出来るのか、といった私たちの課題に至るまで、新約学が専門の安田さんらしく、聖書翻訳の課題などにも触れながら、示唆に富んだお話しを下さいました。

特に、第2回の学習会は講演録も発行されて各教会に配布されていますから、ぜひ手に取って読んでいただければと思います。



### 部落問題に取り組むキリスト教連帯会議報告

沼崎勇

(日本福音ルーテル京都教会・修学院教会・賀茂川教会牧師)

部落問題に取り組むキリスト教連帯会議常任委員

部落問題に取り組むキリスト教連帯会議(以下「部キ連」と略す)第41回総会が、2024年5月20日、在日韓国基督教教会館において開催された。部キ連は、全国にあるキリスト教団・教派が連帯して部落差別を克服することを目指す運動体であり、重要な活動の一つは、

狭山事件は、1963年5月1日、埼玉県狭山市で高校1年生の女性が行方不明になり、警察が身代金を要求した犯人をとり逃がし、その後被害者の遺体が発見された事件である。当初から周辺の被差別部落を中心に捜査が行われ、当時24歳だった被差別部落に住む

石川一雄さんが、別件逮捕された。

石川さんは、貧困ゆえに小学校にほとんど通えておらず、読み書きもほとんどできなかった。そのような石川さんは、殺人・死体遺棄についての自白を迫られたが、長らく否認を続けた。しかし、一家の大黒柱であった兄が犯人であるとたまたま、加えて「自白をすれば10年で出してやる」という捜査官の誘惑によって、6月23日、石川さんは「自白」に至る。

1964年3月11日、一審の浦和地裁で死刑判決が出されたが、翌12日、東京高等裁判所に控訴。9月10日に行われた控訴審

で、石川さんは否認に転じ、無実を訴えるも無期懲役となり、1977年、最高裁の上告棄却、それへの異議申立て棄却で無期懲役が確定した。それから、石川一雄さんは再審請求を続けているが、1994年、仮出獄となったものの、今もって再審は開かれていない。

狭山事件の問題性は、被差別部落に犯人がいるという予断のもとに、捜査の段階から被差別部落に的が絞られた結果、石川さんが被差別部落住民であることにより、逮捕されるに至ったことである。さらに狭山事件の問題性は、取調べにおいて、石

川さんが学校教育をほとんど受けていなかったことによる「無知」を利用し、彼を欺き「自白」をつくり出したのであり、部落差別が、冤罪を生んだ重要な要素になっていることである。

石川一雄さんは獄中で文字を獲得し、次のようなメッセージを書いていく。「私にとって生命とは、真実をつらぬくということであり、(奨学生の皆様に)『解放新聞』第542号、1971年12月6日」と。

### 山内量平探訪記⑧「量平の回心」

古屋四朗

(日本福音ルーテル日吉教会信徒)

昨年、山内量平先生をしのぶ旅に出た私は、かねて連絡してあった日本基督教団田辺教会の南澤牧師の案内で、昔の田辺教会の場所、教会墓地、五明楼跡地などを回り、最後に芳養(はや)の松原の手前で下ろしていただききました。

明治17年5月12日の夜、山内量平は、旅館・五明楼での大石余平との議論を打ち切って馬に乗り、いわゆる熊野古道を西に向かつて、芳養の海沿いに差しかかりました。彼は月光の下、波の音を聞きながら、「量平の悪人、男なら悔改めを敢行しろ!」という、余平の叫び声を心の中で繰り返しました。「神は天地の造り主、万物は神の力で創造されたものだ」と考え及んだとき、突然神の靈光に触れた感じがして立ち止まりました。道沿いに一軒の掛け茶屋があり、量平は、茶屋の老婦人に馬を頼んで、徒歩で五明楼に引き返しました。夜明け前に、彼は五明

論を打ち切って馬に乗り、いわゆる熊野古道を西に向かつて、芳養の海沿いに差しかかりました。彼は月光の下、波の音を聞きながら、「量平の悪人、男なら悔改めを敢行しろ!」という、余平の叫び声を心の中で繰り返しました。「神は天地の造り主、万物は神の力で創造されたものだ」と考え及んだとき、突然神の靈光に触れた感じがして立ち止まりました。道沿いに一軒の掛け茶屋があり、量平は、茶屋の老婦人に馬を頼んで、徒歩で五明楼に引き返しました。

楼を叩いて、へール宣教師と大石余平の前に、前日の振る舞いを謝り、自分の回心を告げました。3人は終日語り合い、量平は宣教師から洗礼を受けました。35歳でした。量平が回心した地点はどこだったのか?佐波巨「植村正久夫人季野がことども」には、昭和10年ころの芳養の掛け茶屋の写真があります。明治17年にも同じ場所にあったかは分かりませんが、ともかくその写真に写っている橋を手がかりに、その場に立つことができま

した。



現在の山内量平回心地と思われる道(上:現在、下:当時)





### 第30期第5回常議員会報告

李明生 事務局長  
(日本福音ルーテルむさしの教会牧師)

6月10日〜12日、日本福音ルーテル教会常議員会がルーテル市ヶ谷センターにて対面開催されました。今回は、3月の各教区総会後の常議員交代を踏まえて、今期の諸課題の共有の機会を持ちました。以下、主な事項について報告いたします。

#### 第7次総合宣教方策の理念を再確認し、今後

の主要課題としての、①教職数の見直しと対応、②神学教育の見直しと対応、③引退教師の他法人での働きの見直し、について共有しました。2034年には日本福音ルーテル教会の現職教職数は50人前後となることを踏まえて、全体教会組織のスリム化、また各個教会間の協力的体制作りを進めることが必要となっています。また神学教育スタッフの減少の状況での教職養成継続も重要な課題となっています。そして、現職の教職のみで教会附属施設・関連法人の責任を担うことがさらに困難となる中、引退教

師の協力を得やすくするための規則変更が喫緊の課題でもあります。

#### 神学教育の課題と

ルーテル学院大学・大学院は2025年度より新規学生募集を停止すること、日本ルーテル神学校は継続されることを今年3月に学校法人ルーテル学院理事会は決定しました。これを受け、今回の常議員会では大学報告・神学校報告と共に、今後の神学教育職養成の課題とビジョンについて発題を受け、意見交換を行いました。教

会に任せ、宣教と牧会の責任を着実に担う教職者を育てるためには、これまで以上に長いプロセスが必要となっている現状認識を共有しました。特に、神学校入学前の段階での教会生活の重要性、ならびに教職養成における教会現場での実践的学びの重要性は、今後さらに増していくことを共有し、神学校と教会とのより緊密な連携と協力が必要となっていることを確認しました。

その他の報告・議事等の詳細につきましては、各教会へ配信された常議員会議事録にてご確認ください。

教職数の減少が現実

となる中、「教職は献身者である」という認識にあくまでも立ちつつも、その働きを継続出来るための環境整備は必須課題となっています。そのための取り組みの一つとして、教職者の育児・介護規定の改正の検討が進められています。現在、方策実行委員会(憲法規則改正委員会を兼ねる)において検討中の「(牧師)育児・介護休業規定」案について経過が報告され、改正案が実際に有効活用されるためには、当該教会信徒だけでなく、近隣諸教会の教職・信徒の理解と協力が不可欠であることが共有されました。また財政的な課題についても意見交換を行いました。今後も各教区・各個教会からのフィードバックを受けつつ、引き続き検討が進められることとなります。

次回常議員会日程の件

次回常議員会は11月11日〜12日、オンラインでの開催が承認されました。

### ルーテル世界連盟(LWF)理事会に参加して

本間いぶ紀  
(日本福音ルーテル甘木教会信徒)



理事会に参加した一部のユースたち

6月13日から18日にかけてスイスのジュネーブ郊外で開催された、ルーテル世界連盟(LWF)の理事会に参加しました。

2025年から2031年までの活動指針の承認が行われ、また理事同士のコミュニケーションの場をもちました。特に印象的だったのが、議長のストゥブキヤル監督がユースの意見を聞きたい、と時間を設けてくれたことでした。LWFはユースのための活動を活発に行なっており、理事会におけるユースの割合も20%以上を占めています。ユースは牧師や神学生だけでなく、私のように社会人や学生の信徒もいます。長く聖職に就いている方、教会に関わっている方、

神学者などが多く集まる会において、ユースの意見を積極的に聞きたいという姿勢があることこそが、ユースの参画や活動へのエネルギーを生み、LWFを作り出し続けているのだと感じました。

私は都合上3日間のみの参加でしたが、ストラテジーについて議論する場やアジア地域の話し合いに加わることができました。新しいコミュニケーション、たくさんの議題や飛び交う意見などの情報に頭の中が溢れかえりそうになりながらも、私に「In Learningで大丈夫、ただ会議を楽しんで」と声をかけてくれたユースや、他の理事やスタッフによる助けが励みでした。これから彼ら、彼女らと共に神様から与えられたこの理事というミッションを楽しみ、応えていきたいと思います。最後に祈りましたが、みなさまのお祈りに感謝申し上げます。

【訂正とお詫び】  
機関紙あすなろの2024年7月号、3面「世界の教会の声」のタイトルに「ペースメッセンジャー」とありますが誤りでした。正しくは「ピースメッセンジャー」です。訂正してお詫びいたします。校正作業における確認を徹底してまいります。大変申し訳ございませんでした。

### 「2024年 ルーテル聖書日課読者の集い」のご案内

『ルーテル聖書日課読者の集い』が神戸市郊外の緑あふれる「しあわせの村」にて開催されます。ルーテル聖書日課の読者ではない方もご参加いただけますので、皆様のご参加をお待ちしております。

〈主題〉聖書の中の女性たち  
～ディアコニアに生かされる～

〈講師〉正木 うらら先生  
(神戸ルーテル神学校・関西聖書神学校講師)

〈日程〉10月21日(月)14時～22日(火)14時

\*部分参加・日帰り参加も可能です

〈会場〉神戸しあわせの村(最寄り駅:名谷駅)

〈申込締切〉9月19日(木)16時必着

〈参加費用〉18,000円(受講料込・1泊3食付)

日帰り参加:1講義1,000円(全5講義、食事代別途)

〈申込先〉

以下を明記の上、メールまたはFAXにてお送りください。

- ①氏名・ふりがな ②所属教会 ③ご住所・最寄り駅
- ④ご連絡先電話番号 ⑤メールアドレス ⑥宿泊/日帰り
- ⑦ツインルームご希望の場合、同室希望者氏名
- ⑧禁煙ルーム/喫煙ルーム ⑨介助者(1名)の参加有無
- ⑩性別※ ⑪65歳以上の方の年齢※

(※⑩・⑪は施設の利用申込時に必要な情報のため、お伺いしています)  
\*「65歳以上の方」と「障がい者手帳をお持ちの方」は、当日「証明書」をご持参ください。

#### 〈お問合せ〉

ルーテル聖書日課を読む会事務局  
(日本福音ルーテル教会事務局内)  
TEL(03)3260-8631  
FAX(03)3260-8641  
seishonikka@jelc.or.jp

